

Session 2

発表 1

シン・ヒョンジュン（聖公会大学校 HK 教授）

【発表概要】

1960年代以降、ソウルの空間的変化は、「南へ」という方向性を示してきた。1970-1980年代を経て形成された江南（カンナム）は、経済的資本ばかりでなく、社会的、文化的資本の蓄積を通して、ソウル、ひいては韓国の中心となっただけでなく、1990年代以降、ソウルの郊外に複製された「新都市（new town）」という都市開発の定型化されたモデルを作り出した。しかし、2000年代以降、「都心再生」というかけ声のもと、相違するパターンの都市開発が行われており、そのうちソウルの西側、特に麻浦（マポ）地区は注目に値する。文化財と文化遺産の不完全さが目立つソウル中心部とは異なり、麻浦は一連の文化産業政策を通じて特別な文化地区として変容を遂げている。とりわけ、2002年のFIFAワールドカップ大会の際に、いくつかの開発計画が施行され、上岩（サンアム）地区は、「デジタル・メディア・シティ（Digital Media City）」という公式的名称のもと、文化産業/創造経済政策の司令塔となったのに比べ、独立芸術の中心地だった弘大（ホンデ）地区は、トランスナショナルな消費と観光のための空間として変貌を遂げている。また、こうした空間的変化の過程で、政策の施行に抗議し反対するさまざまな共同体運動が発生・展開されている。今回の発表は、ソウル西部地区で複数の主体によって行われる「場所の占有（taking place）」実践の経験を通じて起こる空間の文化政治の様相を試論的に分析する。